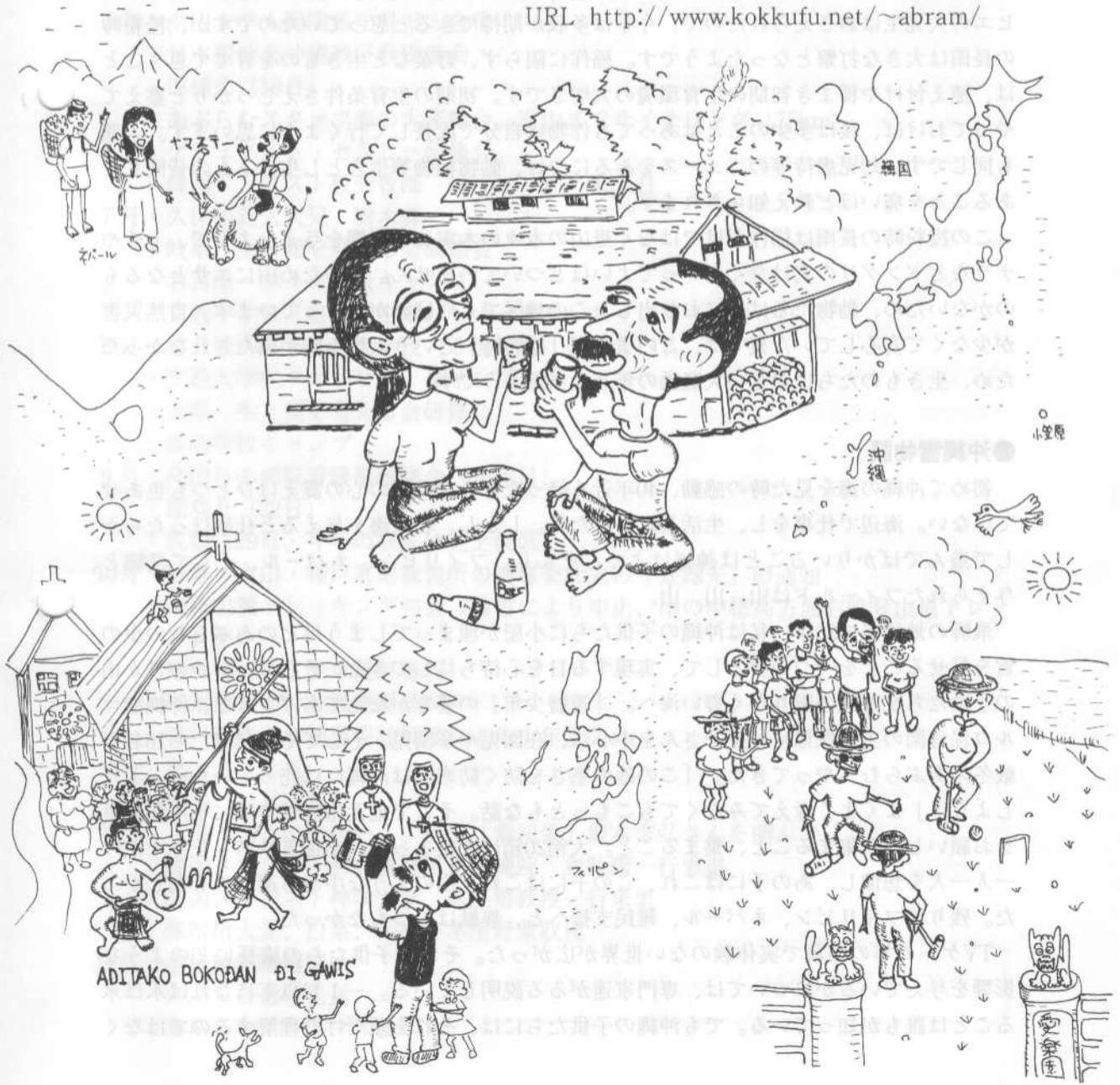


# あぶら通信

第28号 2006年12月 あぶらむの会発行  
〒509-4121 岐阜県高山市国府町宇津江3225-1  
TEL 0577-72-4219 FAX 0577-72-4494  
E-mail : abram@kokufu.net  
URL <http://www.kokkufu.net/~abram/>



ADITAKO BOKODAN DI GAWIS

# 飛驒便り

あぶらむ通信をお手の皆様にはお元気でお過ごしのことと  
思います。2006年も、こうして一年間の私たちのささやかな  
歩みを、皆様にお届けすることができることを嬉しく思います。

## ●授粉時の長雨

今年には自然災害も少なく、表面的には比較的平穏な年のように見えて、その割には作物関係は不作の年でした。

一番おどろいたのは稲作で、最も多く収穫した年の40%減と、さんたんたるものでした。私たちなりに原因の究明を試みているのですが、一つは「穂ばらみ（授粉時）」の長雨と、地力の相対的低下（慢性的肥料不足）にあるように思われます。昨年、大きな被害をうけたヒエの大発生はおさえられたので、今年には多収が期待できると思っていたのですが、授粉時の長雨は大きな打撃となったようです。稲作に限らず、野菜など生きものを育てて思うことは、植え付けや種まき初期の生育環境の大切さです。初期の生育条件さえしっかりと整えてやっておけば、後は多少のことはあっても作物は自分で成長して行くように思います。人間も同じです。幼児虐待等のニュースをみるにつけ、動物植物等生きとし生けるもの皆同じであることを痛いほど教え知らされます。

この授粉時の長雨は稲作だけではなく里山の木々の木実にも影響を与えたようで、トチやナラなどドングリの実には全くといってよいほどついていません。そのため山にエサとなるものがないため、動物たちは里におり出し、この地区でも熊騒動がおこっています。自然災害が少なく安心していた裏では、このように「授粉時」という大切な時が満たされなかったため、生きものたちはお互い大騒動の年となったようです。

## ●沖縄雪物語

初めて沖縄の海を見た時の感動、40年近く経った今もその時の心の震えはひとつも色あせていない。海辺で仕事をし、生活したかった私。しかし、私に海を与える仕事ほったらかしで遊んでばかりいることは神様はよくごぞんじ。フィリピン、ネパール、そして飛驒と、与えられたフィールドは山、山、山。

飛驒の地に来て20年、私は沖縄の子供たちに小屋が埋まってしまうほどのあぶらむの里の雪を見せることを一つの夢として、実現する日を心待ちにしてきた。そして、いつの日か山の子供たちを沖縄の限りなく青い海へ。「還暦少年」の夢をかなえてあげようと、沖縄聖マルコ保育園の主任保育宮城正子さんを中心に、在園児や卒園児、そしてその父母たち16名が厳冬のあぶらむへやってきた。「この地の寒さを防ぐ防寒具は沖縄には売っていない、どうしよう！」よくよく考えてみなくてもごもったもな話。そこで地元増島保育園に不用防寒具をお願いしたら集まること、集まること。大箱20箱ほど集まった。参加者リストを見ながら一人一人を想像し、あの子にはこれ、この子にはこれ、山のような中から選ぶのも楽しかった。残りはフィリピン、ネパール、難民支援へと、無駄は一つもなかった。

TVゲーム等の出現で実体験のない世界が広がった。それが子供たちの成長にどのような影響を与えているかについては、専門家達が語る説明している。-1℃以下になれば水は氷ることは誰もが知っている。でも沖縄の子供たちには、それを頭だけで理解するのではなく

“からだ”で知ってほしいと思った。そこでアイス・キャンディーづくりに挑戦となった。夕食前、カルピスを型に入れベランダに置いた。氷は冷凍庫でつくるもの、戸外に置いたままでアイス・キャンディーになるなんて…。翌朝5時ごろから子供たちの声。それだけでも子供たちの胸ワクワクが十分に伝わってきた。寒暖計を見れば-6℃、私は自信満々に戸をあけベランダへ。しっかりとアイス・キャンディーができていた。子供たちの喜びよう！真冬の早朝から天然アイス・キャンディーを口にしていた沖縄の子供たちだった。

私もこの年齢になって自分の子供時代をふりかえる時、記憶というものは、心の震えがともなわない限り、記憶として心に刻みこまれないことをしみじみと思う。私のささやかな夢をかなえてくれた沖縄の子供たち、ありがとう。これからもこの活動を続けて行きたいと思っている。

### ●あぶらむと家庭裁判所補導委託制度

2004年にこの制度を通して、初めての少年を預かってから4人目の少年となった。初めての方のために、この制度について記してみたい。

「家庭裁判所では、非行のあった少年について、再び社会に迷惑をかけず、社会の一員として生活していくことができるように、保護観察による指導や、少年院の教育を受けさせるなどの処分を決めます。その際、すぐに結論を出さず、しばらく少年の生活態度などを見てから処分を決めることもあります。これを「試験観察」といい、「補導委託」は、試験観察の中で必要に応じて行われるものです。」（最高裁判所事務総局「少年たちにあなたの力」—家庭裁判所の補導委託制度より）

最初の少年を預かる時、女房は私にクギを刺した。「いつも短気をおこして爆発ばかりしているあなたに、そんな仕事ができるの？これはあなた自身が問われる仕事なんだからね！」何と耳の痛い言葉でしょうか。あの当時と比べ、特別気が長くなったわけではないが、各々6ヶ月間のここでの生活を終えて、今回で早くも4人目の少年となった。どうやらここへ預けられた少年たちの方が、私に歩調をあわせてくれていたようだ。3人目の少年を送り出した前後に、岐阜、富山、神戸家庭裁判所から、補導委託の「登録先」としての通知が舞い込んできた。これからもこのような働き、あぶらむの大切な働きとしてやりなさいということと思い、引き受けることにした。

この仕事は基本的にはボランティア活動である。依頼先の家裁からは医療費を含めての衣食住に関する実費が支払われる。日常生活で共に仕事を担う中で大ケガなどさせた時の医療費負担など、誰がもつかなど法的には明確になっていない。私もこれからお世話になるかもしれないからあまり大声ではいえないが、ある程度手厚い保護のある高齢者に対して、次代を背負う若者たちへの配慮、環境はあまりにも寒々としたものがある。昔から云われる通り「子供は親、大人、社会の鏡」である。痛いほどこの言葉が突きつけられる。一人の大人として、ここで生活を共にする少年たちに、大人とはどういうものかを示したい。それは女房の言葉通り、自分が一人の大人となって行く「大人業」の世界でもある。年齢さえ重ねれば自動的に大人となって行くことの大間違いを、少年たちは教えてくれる。

## ●青木恵哉師の故郷を訪ねて

未熟な中味でありながら、私もかたちの上だけは「還暦」という一つの節目を迎えた。ふり返ってみれば、「もしあの時にあの事が、あの人と出会っていなければ」という「歴史のもし」ならぬ「人生のもし」だらけで、背すじが寒くなるような思いばかりだ。数ある私の「もし」の中でも、ハンセン病療養所沖縄愛楽園を幾多の苦難の中、自力で創立された青木先生との運命的な出会いは決定的だった。生涯、お会いできるとは思ってもいなかった子孫の方々と、昨年青木先生の記念式でお会いできた。そのことの縁で本年10月、先生の故郷徳島をお訪ねした。著書「選ばれた島」の書き出し部分が立体的に甦ってきた。

あぶらむの働きにたどり着くまで、私は多くの偶然によって導かれ、支えられてきた。そしてそのこと故に、私も誰かにその「偶然」というきっかけを提供できる人間でありたいと思うようになっていた。

「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」というイエスの言葉がある。最近、この言葉が自分の前に立ちはだかるようになってきた。人生旅路を旅する中で、つまずきそうになったり、立ち止まらざるを得なくなったり、歩むべき方向性を見失ったりと、様々な問題をかかえる人に、私たちが力になることがあればという現在のあぶらむの働きは、多くの偶然と出会いによって導かれ、支えられてきた者としての、ささやかながらも心からの恩返しであると思っている。青木先生の故郷に立った時、何か自分の原点に立ち還ったようだった。

これから数年の内に、家裁の補導委託制度を通して預かる少年を含め、次代を背負う若者育てのプログラムを立ち上げたいと願っています。その時はまたお力をお貸し下さい。

今年は現在のところ本格的寒さの訪れが遅いようです。温暖化傾向とはいえ冬の寒さはやってきます。どうぞお元気でお過ごし下さい。

それではよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

2006年12月

あぶらむの会 代表 大郷 博

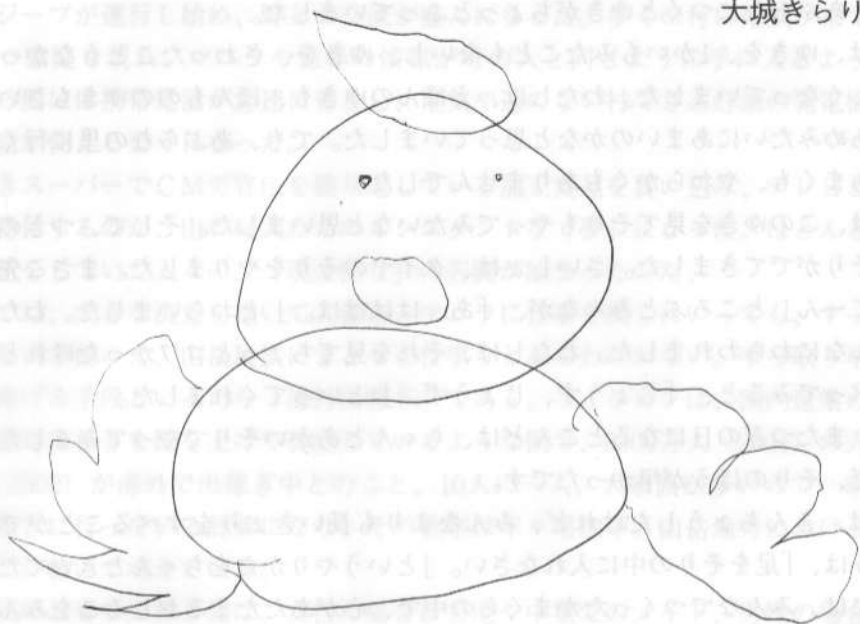
## 2007年 あぶらむ主な行事予定 Part I

- あぶらむ雪祭り ..... 2月9日～12日
- 40℃アラスカ・オーロラの旅 ..... 2月20日～28日
- 第11回子供から大人までのネパールの旅 .. 3月25日～4月5日
- 今年も田植えが終りこころで一服コンサート  
—— 津軽三味線2代目高橋竹山 —— ..... 5月26日(土)
- 天生湿原の水芭蕉とブナ原生林の道  
トレッキング ..... 6月2日～3日

## 沖縄雪物語

あぶらむ雪祭り参加メンバーの一大勢力、大城ファミリー（父母、娘4人）が初めて雪にふれた、その心の震えを寄せてくれました。写真と共にお伝えします。

大城きらり（2才）



きらりが書いたゆきだるま・・・その中で寝ることのできる大物です！

### 「ゆきまつりのこと」

ようちえん 2くみ 大城うらら（4才）

2月17日わたしたちみんなであぶらむのさとにいきました。

わたしは、はやくゆきをさわりたいな～とバスのなかでもずっとおもっていました。

あぶらむについたときは、わたしがゆきをみたときは、とうこちゃんとびっくりしました。ゆきがいっぱいで、きもいっぱいでもつちがないからびっくりしました。みんないろんなことでびっくりしていました。

そとがゆきのれいとうこでした、じゅーすがあいすにかわっていました。

ごはんは、たべられないぐらいの大きいさらではこばれてきました。どれからたべようかまよいました。

ゴリエとびらみっとをやりました。1ばんうえのきらりはおちそうでしんばいでした。ちちは、よっぱらっているとおもいました。

いぬがこわかったけど、またあぶらむにいきたいとおもいます。

大ごうせんせいげんきでね。

うららより

## 「たのしかったなそりあそび。」

2年1組 大城 るな

2月17日に、わたしたちは、あぶらむの里に行きました。

わたしは、ゆきと友だちになってそりもうまくなりたいたわたしは思っていました。そして、やっとあぶらむにつくとゆきがちょっとふっていました。

わたしは、ゆきを、1かいてもみたこともないし、ゆきを、さわったこともなかったのでもうれしくなっていました。わたしは、えほんのゆきも、ほんもののゆきもさいしょはぜんぶわたあめみたいにあまいのかなと思っていました。でも、あぶらむの里に行くと本物のゆきは、あまくも、やわらかくもありませんでした。

わたしは、このゆきを見てそりもやってみたいなと思いました。そして、つぎの日になるとやっとそりができてきました。さいしょは、タイヤのそりをやりました。まさこ先生がそりで「ドッてーん」ところぶとみんなが、「あ、はははは。」とわらいました。わたしの父さんも、みんなにわらわれました。わたしは、それを見てちょっとコワかったけれどゆうきをだしてすべてみると、「じょうず、じょうず。」といてくれました。

そして、またつぎの日になるとこんどは、ちゃんとあかいそりでやってみました。タイヤよりもまだ、そりのほうが早かったです。

わたしは、きんちょうしたけれど、みんなよりも長いきよりをすべることができました。そりゆうは、「足をそりの中に入れなさい。」というやりかたをちゃんときいてたからです。

さいごには、みんなでつくったかまくらの中で、心があたたまるおしるこをみんなで食べました。夕ごはんも、とてもでっかかったです。

わたしは、ゆきをしらなかつたけれどおしえてもらって、わたしは、すごくさいこうの思いでになったと思います。

かえりのバスにのる時に、ゆきをもってかえろうとしたけれど、ダメだといわれました。とってもざんねんだったけれど、しかたないなあ~と思ってがまんしました。

またあぶらむの里に行きたいです。

## 「あぶらむの里をふり返って」

6年 大城 穂乃香

2月17日に、初めての家族6人での旅行でした。私は、何日か前から早く雪を見たいなあとか、あぶらむの里はどういうところかなあなど、とても楽しみでいっぱいでした。

そして、ぎふ県に着いて見た事もない風景に見とれながらバスで何時間かたつと、高速のサービスエリアみたいな感じの所でバスがとまりました。私は、さっそく外に出ました。ほうしも手袋も何もつけていなかったのでもヒンヤリしてて寒いというよりはつめたくて、あっという間に鼻水がピーピー出ました。久しぶりに見る雪はバスから見た印しょうと少しちがって、思ったよりもとてもカタイ雪が沢山ありました。又バスにもどり何時間かバスを走らせていると雪がふってきました。すぐにまどを開けてみんな雪をつかもうと必しでした。

そして、バスの長旅も終わりあぶらむの里について、次はちゃんと手袋ぼうしをつけて遊

びました。さっきの雪とは、またちがいとてもやわらかい雪などが沢山あり、思うぞん分遊びました。

遊びつかれた所で夕食でした。夕食でも見たことの無い夕食ばかりだったので、どれを食べようかまよいました。私が一番おいしいなあと感じたのはみそでした。また食べたいです。

そして、朝がきました。私とお母さんは、早くおきたので散歩を楽しむ事にしました。先生もいて、ソリなどをして遊び、昨日よりも雪がふわふわしていました。沢山、雪にはまったりして楽しかったです。

## 「あぶらむにて」

母 大城 美智子

2006年2月、我が大城家6人もマルコ保育園のグループの一員として雪まつりに参加させていただきました。

家族6人全員での参加となった事は、偶然にしてとてもうれしいことでした。

私たちの家族は、皆が各々に一日の時間を思い思いに使うためにすれ違いが多く、家族全員が揃う時間がほとんどもないのが現状です。

それが、「あぶらむの里」での2泊3日は…時の流れに身をまかせ～！ 雪まつりを大いに体感したのでした。

「あぶらむの里」に到着直後から。「今何時…？」「時計は…？」とぐるりあたりを見渡す子供たち…視線の先には時計はあるものの…針は動く気配がないように見えました。ただそこにかけてあるだけの壁飾り？のように見えました。家の中の太い柱…樹齢100年？の木柱…何かが違う

「ん～！時計？無いよ！！」大郷先生から笑顔が返ってきました。その言葉ももらい、時計を探す目も、忙しい心もどこかへ…白い雪の世界にくぎづけになったのでした。

朝早く母と長女は、二人で部屋の窓から見える“そこ”へ行きたくて飛び出しました。雪の中を歩き、タイヤで雪の上を滑り、距離を競いました。

また、父との散策では、雪の中にズボズボはまり、動けなくなる父を見て「ケラケラ」笑い転げる娘たち、初めてのスキー服に身を包み、まるで宇宙服？歩く姿も宇宙遊泳？「足があ～」と手をついたら「手も～」と四つんばい。笑っていると雪が口の中に…思わず腹ばいのまま両手を先に出し、むしゃむしゃ食べ始めてしまう。(笑) そり遊びでは、スピード競争！距離競争！大人も子供も真剣に遊びました。サーフィンみたいに立ち乗りしたり、アンパンまんみたいに腹這いになってみたり、大人げなく子供に勝って喜んでしまっていました。

また、忘れることができないものに、“食事”があります。長いテーブルに皆が揃い、テーブルいっぱい広げられた品々は、何から手をつけていいのか、また箸も止まらない！休めない！！自分の子が誰の膝の上で世話になっているのか、そんなのもお構いなし…ひたすら、箸が動くのでした。(母) かまくらの中で食べたおやつ“あったか～いおしるこ”も、忘れる事のできない一品でした。

最終日の夜には、フルキャストによる大宴会！！

大人も子供も一緒になって大はしゃぎ、我が大城家も両親と長女が土台となり、2段目に次女三女頂点に2才の末娘にした、組体操三段ピラミットが大成功！拍手をもらうことができました。

気がつけば、時計を気にする事も、頭で何かゴチャゴチャ考える事もなくなっていました。何か力が抜けて自然に“後”を考えず、“今”を楽しむ事ができました。

あぶらむでの3日間、何かをさせられたという感は、全くないのですが、何か大きな力が湧いてきたのです。「さあ～また、はじまるぞ！！がんばろう！！」p(^)q  
P.S お土産にと雪を持ち帰ろうとした娘のポケットから、雪を出させた事は後に後悔した母でした。

### 「あぶらむの里での思い出」

父 大城 勝也

2006年2月吉日、名古屋セントレア空港到着。とてもきれいな空港、洒落た名前の空港。あぶらむの里の大郷先生の出迎えてリムジンバス、心ワクワクの沖縄人て感じであぶらむの里へ向かう。雪は降って歓迎してくれるかな？という気持ちで名古屋から岐阜へ向かう。一山一山越えて行く、一山越えるたびに残雪が増えていく。雪を見るだけで感動、途中パーキングエリアで雪に触れた感動。気温もどんどん下がり、山奥のあぶらむへの期待がさらに膨らむ。長時間バスに揺られあぶらむの里にやっと夕方に到着、大人も子供たちも大はしゃぎ、こんなたくさんの雪は初めてで大感動。今回のあぶらむの里への旅行は私たち家族にとっては初めての家族揃っての県外への大旅行となりました。私たち沖縄人にとっては雪を見る雪に触れるだけでも感動します。子供たちにとっては本当に初めてで雪を見たとき触れたときの最初の一言は何というのだろうかとそこも気になりました。

大城 るる



うららとあやのねえちゃんが、とてもかわいいうさぎをつくったばめん。



雪を見れる、雪に触れる、雪で遊べる！！なんて、沖縄育ちの私にとって、めったにないとても嬉しい企画！！…のはずなのですが、私は出発ぎりぎりまであぶらむ行きを拒んでいました。寒いのが苦手な私、雪の世界なんてとんでもないと思っていたからです。飛行機に乗って、バスにゆられて、やっとあぶらむに到着。バスから降りると、そこには見たこともない雪景色が広がっていました。右も左も前も後ろも白い！！雪だ～！！あぶらむのあの雪景色を見た時の衝撃は今でも忘れられません。

あぶらむの3日間、たくさんの「初めて」を経験しました。自然冷凍庫でつくったアイス・キャンディー、タイヤ滑りやそり、雪だるまや雪うさぎ、かまくらも作りました。子供たちは大はしゃぎ、いえ、私も含めて大人達も子どものように大はしゃぎでした。私は、裏山の50mの斜面からのそり滑りに挑戦しました。ものすごいスピードとスリル！！途中で、そりから投げ出される人まで…それを見てもみんなは「大丈夫!？」とは聞かず、みんな大笑い。1日中、時間も気にせず、みんな思いきりはしゃいでいました。寒さ大嫌いの私は、はしゃぎすぎてあの雪世界の中で、汗をかくほどでした。

本当に最高の3日間でした。何も考えず、時間を忘れるほど楽しくて、こんなに中味の濃い旅行は初めてでした。あぶらむのスタッフの皆さん、絶対また行きますね～！！

### 「楽しかった雪まつり」

世話人、保母 宮城 正子

「あぶらむの雪まつり」に2006年2月17日～19日の予定で大人(65才)～2才の子どもまで参加しました。

中部国際空港で待ち受けていたのは、帽子をちょこんとかぶり、ちょびヒゲの大郷先生。挨拶もそこそこに、早々とバスに乗り込みました。雪をさわった事のない子がほとんどで、バスの中ではワイワイと雪の話で盛り上がっていました。

岐阜へ向けて走るも雪は見られず、子供たちもちょっとガッカリした様子「雪降ってないじゃん」と怒りにも似た言葉があっちこちから聞こえ矛先はボスの大郷先生へ。「大郷先生雪は?」「雪ないの?」「ほんとうだね雪ないねエ～」「オイオイそんな返事しないでヨ」と思う私。

岐阜へ近づくにつれ、小雪がバスの中で舞っている。「ああ雪だあ～」暖房されているバスの窓を開け、かわいい手を出して雪の感触を確かめている子供たち。雪の量は、だんだん増え「雪だ、雪だ」の大合唱。目的地の「あぶらむの里」で目にしたのは、山のように積もった雪で、到着すると我先にとバスを降り、荷物はそっちのけで早くも、大人、子ども雪合戦が始まりました。そこであわてたのは、大郷先生とあぶらむのスタッフたち。手袋と長靴を持って走ってくる「しもやけになりますのでつけて下さい」と言われても、子供たちには、何の事やら???? (沖縄では、しもやけという言葉はあまり聞かないので)

こうして「あぶらむの里」での生活がスタートしました。大郷先生が、沖縄の子供たちに雪の体験をさせたいという思いがず～っとあり、願いがかなった大郷先生は、楽しそうに子供たちに話しかけておられた。

「まず、最初に作ったのは「アイス・キャンディー」、翌朝の朝食のデザートです。自分で「アイス・キャンディー」が作れる喜びをわかちあいました。大人はコップ作り、夕食時氷のコップで飲む日本酒のおいしかった事。また大きな調理用のボールを2つ使い氷のフルーツカップが出来上がり、その中にフルーツの盛り合わせでキャー素敵一。(我先に取りあった)

外での雪の体験は、初級コース、中級コース、上級コース順にクリアした人が進んでいく。ソリやタイヤでの滑り、子供たちの上達には、目を見張る物がありました。滑っては転び、ソリやタイヤを自分で持って登ってくる姿、何度も何度もくり返し楽しんでいました。

「かまくら」を自分達で掘り、その中でフッフッしながらおいしいおしるこも食べました。雪上歩きは、まっ白な雪の上を歩くのですが、どうも体重の重いのは不利な立場。雪の中に入った足が取れない。やっとぬけたかと思うと足だけ、長靴は雪の中だから「ダイエットしろヨ」とは、口が裂けても言わないという大郷先生。(いってるじゃないですか!)とにかく前に進むのは、至難のわざでした。雪の山から逆立ちで滑ってきた、大人、子どもを見て「こんな滑り見た事ない」写真をとろう大郷先生もビックリ。それだけ、いろいろな体験したかったのでしょう。雪ダルマ作りや、雪うさぎ等、大人も子どもも、ほんとうに心から雪とたわむれたと思います。沖縄の大人～子どもは、朝早くから昼食(2時間休みをとっただけ)夕方は食事だよ～と呼ばれるまで、外にいました。

大郷先生が、私に会うたびに、常々話しておりました事が「沖縄の子供たちに雪の体験をさせたいんだよ」、それと逆に「高山の子供たちを沖縄の青い空と海へつれていきたい」と…。「あぶらむの里」へ果たして何人の方をつれていけるかちょっと不安はありましたが、まず歩み始めよう1歩という事で今回16名の方が参加しました。

大郷先生の思いは的中し、沖縄の大人～子どもはこんなにも雪の旅を楽しみました。そして、育さんおいしい食事、またいろいろな注文にも快く受けて下さりほんとうに感謝致しております。ナルさん、しずやさん、舞さん、沖縄の私達のためにほんとうにありがとうございました。

大郷先生の夢をちょっとだけお手伝い出来たかなあーと思います。

来年も参加者がいるといいですね。大郷先生。

## 2007年 あぶらむ主な行事予定 Part II

- 乗鞍岳周辺お花畑トレッキング …………… 7月21日～22日
- あぶらむ自然学校 …………… 8月4日～10日
- 中秋の名月と荘川蕎麦の会 …………… 9月24日(14夜)
- 紅葉狩り、天生峠から白川郷へ …………… 10月6日～8日
- 海と山との出会い  
—— 富山寿司栄 坂本吉弘さんを囲んで —— …………… 11月中旬

# 沖縄雪物語写真集



雪をみるなり人間ダイブ。側で雪を食べ続ける子。楽しいってこんなことなんでしょうね。



“お姉ちゃん、お馬になってヨ” 大人も子供も無心でただただ雪とたわむれる。



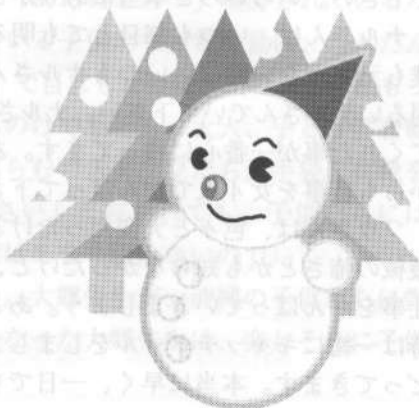
巨大かまくらの中でおしるこ食べて・・・。あたたまったらもう一遊び。



大城ファミリーの人間ピラミッド。4人姉妹が両親の背に。「私も背負っているのヨ」と長女のほのかちゃん。飛驒の山で泡盛でカンパイ！！



雪うさぎと沖縄美人。あぶらむの里のマスクットとしていつまでも置いておきたかった。



## S少年の旅立ち

家庭裁判所の補導委託制度で預かったS少年（17才）が、ここでの6ヶ月間の生活を終えて帰っていった。ささやかな送別会の時の旅立ちの言葉、彼は律儀にも文章として残していつてくれた。彼がこれからもまっすぐに歩んでくれることを祈りつつ、少年の旅立ちの言葉をお届けします。

### 「あぶらむのみなさんへ」

俺はもうここのあぶらむに来て半年が経ちました。

最初の頃はタバコの事とかで色々と迷惑をかけてごめんなさい。

俺は事件を起こしてこのあぶらむに来たんだけど、最初は何もかもが全部不安で、どんな所やと思っていたけど、来てみたら一人一人の人たちがとてもやさしくてあたたかい人ばかりだったので、今思えば本当にありがたいです。

自分はここで生活をして、最初の頃はテキトウにこの半年やっていけばいいわとしか思ってませんでした。だけどあぶらむのみなさんと過ごして行く中で、タバコの事でも先生やスタッフの人たちは何回もこんな俺を叱ってくれて、本当はもううんざりしていたと思うけど、また1から俺に色々な事を教えて下さって自分は本当に変わったと思います。

先生たちの気持ちが自分にも伝わって、後の4ヶ月間は自分でも本当にがんばったと思います。がんばれたのもこのあぶらむのみなさんのおかげだと思うので、本当にお礼をいいたいです。自分の中の思い出は、いつもいつもみんなと一緒に食事を食べた事です。恥ずかしい事に、今まで家族とかとみんな一緒に食事をしたことがなくて、このあぶらむに来てみんなで食べて、家に帰ったら毎日は無理かもしれないけど、一週間に一回は家族と食事をしたなと思いました。

ここからは一人一人の言葉で、最初に育さんで、育さんには毎日おいしい食事を作って下さって、しかも体にいいと考えた物も作って下さって本当にありがとうございます。最初の頃は、タバコの事とかでいっぱい迷惑かけたけど、それも自分の中ではいい思い出になりました。あの時はすいませんでした。本当に育さんは体には一番気を付け、元気にして、いつもいつもおいしいご飯をお客さんに作って下さい。この半年間本当にありがとうございます。

トモさんは、いつも俺を叱ってくれていたけど、これからはその事を思いだしてちゃんとしていきたいです。あと、トモさんとの思い出は、ホームさんと三人で高山に行った事です。川の所で三人で食事をしたり、土手でねっころがったりして本当にあの時は、楽しかったです。またいつか行きましょう。勉強の方も僕もがんばるのでトモさんもがんばってやって下さい。いろいろと本当にありがとう。

ナルさんは、いつも毎日とても明るくて、みんなの笑顔を作ってすごいなあと思いました。僕も元気がない時は、いつもナルさんの明るい笑顔で元気をもらっていました。これからも、明るいナルさんでいて下さい。ナルさんとの思い出は、先生が沖繩に行っている時に僕を叱ってくれた事が一番心に残ってます。あの時は怖い顔で叱ってくれて本当にありがとう。これからは仕事を女4人でがんばって下さい。

ソウさんは、色々大変だったけど早く手の指を治して下さい。僕たち二人は、あの時は機械の怖さとかも知らなかったけど、この事をいい方向にしてこれからはお互い気を付けて仕事をがんばっていきましょう。あと、2月に僕はここに来たいと思っているのでまたその時は一緒にキャッチボールをしましょう。もっとうまくなって、コントロールをよくしてもどってきます。本当に早く、一日でも早く指を治して下さい！！お世話になりました。

ユウジンさんはとても料理がうまくて、特にチヂミとかがとてもおいしかったです。また来た時にはぜひ作って下さい。あと、キュウミンに色々大変なことを教えごめんなさい。

キュウミンは、いつも泣いているけどもう少し強い男になって下さい。色々サッカーをしたり、野球をしたりしてとても楽しかったね。また来た時は一緒にまた遊びましょう！！あと運動会の騎馬戦の時は思った以上にすごかったね。あの時は僕もビックリしました。だけど僕がすごかったから、キュウミンはぼうしを取られなかったんだよ(笑)。まあ保育園のみんなと仲よく楽しくこれからもして下さい。

静谷さんはいっぱいあるけど、休みの日にいつもいつも迷惑をかけてごめんね。ガソリン代はいつか払います！！静谷さんとの思い出は2人でどこかの山を自転車で登ったのを覚えていますか？！あの時は本当にヘトヘトでした。だけど景色はとてもキレイだったので、またいつか行きましょう。僕の部屋でも仕事の事とかでよく相談にのってくれてありがとう。これからも仕事をケガのないようにがんばって下さい。

先生は、あんまりないけど色々とお世話になりました。この半年はキビシク仕事の方でも叱ってくれて僕も少しは成長したと思います。

2人でサウナの近くの池を作った事を覚えてますか？？正直やる時はダルかったけど、先生と初めて2人で作って汗を流し叱られながら作った物なので、僕の一番の思い出です。先生からはいっぱい色々な事を学んだけど、学んだ事をちゃんとやれるようにがんばりたいです。信用もどれだけ大切かが分かりました。これからは一つ一つがんばって信用を作って行きたいです。あと、一緒にいつもお風呂に入っていたけど、もう僕がいないので淋しくなるでしょう！！僕もとても淋しいです。次からはキュウミンと二人で入って下さい！！

もう1つは、これからも僕みたいな子がたくさんこのあぶらむに来るかもしれないけど、みんなマジメでカワイイのでこれからも1人1人を助けていい方向にやって下さい。本当にこのあぶらむの里に出会ってよかったです。

先生も、体は良くないけど本当に体には気を付けて仕事をやって下さい。無理のないように。

僕の感想はいっぱいあるけど、本当にこのあぶらむにこれととてもうれしいです。ここは色々な出会いがあってお客さんもたくさんの方が来て一緒にお話をする中で学ぶ事もあるし本当にいいなあと思いました。最初の頃は色々としたけど本当に反省してます。でもその後はがんばったと思うのでゆるして下さい。この半年で自分でも本当に変わったと思います。自分がこの半年死ぬほどがんばれたのも、先生やみんなのおかげだと思うので本当に感謝してます。ありがとう。

この後は、少しずつ勉強の方もがんばって保育士か福祉の仕事をしたいと思っているので、がんばってするので応援よろしくおねがいます。本当にいつかは先生みたいに世間に役立つために、1人でも多くの少年を助けるために僕も今からはがんばりたいと思います。本当にこの半年間ありがとうございました。これからは家族と友達ともいい方で仲よくしていきますのでずっと見守って下さい。また2月に来るのでその時はよろしくおねがいます。

あと、先生と約束したタバコとピアスとかは守るけど、マユゲは約束しませんのでどうぞよろしくおねがいます。

もう1つ僕が今楽しみにしている事は、友達や家族に自分が変わったところを見てもらって、友達の中でも1人でもいいからマジメに俺もならなアカンなあと思ってほしいです。

本当に僕も変わってとてもうれしいです。

これからはちゃんとした生活をしたいです。

## あぶらむガヴィス基金報告

2004年、立教大学時代にフィリピン、キャンプ参加者達と協力して設立された「ガヴィス基金」があぶらむの会へ引き継がれた。(ガヴィスは現地イゴロット語で「良きもの」の意味)

少しずつ独自の活動ができるようになってきたが、本年は韓国メソジスト教会牧師、徐(ソ)さん一家3人が研修のため一年間あぶらむへ滞在。また、ネパールからこの10年間あぶらむ主催の「子供から大人までのネパールの旅」を支えてくれたホーム・シュレスタ君の1ヶ月間のあぶらむ研修プログラム。そして、昨年に引き続き反町真理子さんが主催するフィリピンNGO「コーディエラ・グリーン・ネットワーク」への協力と、少しずつではあるが活動の幅が広がってきた。フィリピン・バキオ市に滞在の反町さんから現地報告が届いたのでお伝えします。

### フィリピン山岳地方の村と人々のために私にできること

環境NGO「コーディエラ・グリーン・ネットワーク」ディレクター  
反町真理子

この「あぶらむ通信」を読んでいる方で、マウンテン・プロビンスやその他の山岳地方(コーディエラ地方)の村々に行かれたことのある方は、どのくらいいらっしゃるのだろうか?

大郷先生が立教大学在籍時代の1980年にチャペル主催で始められたフィリピン・キャンプは途中何年か実施されなかった年があったそうだが、1998年まで20年間続き、約400人の立教大学の学生が参加したそうだ。98年以降も、サークルに形を変えて立教の学生たちがたびたびマウンテン・プロビンスやカリంగా州などを訪れていると聞いている。

私がフィリピン・キャンプに参加したのは1984年。立教大学社会学部4年に在籍していたときだった。サガダ村、マリコン村、ギナーン村に滞在した2週間余りの間に、貧しいながらも生きる力に満ちた若者たちと出会い、頼り助け合い、ときには迷惑さえも掛け合いながら暮らす小さな村社会の真のあたたかさに触れ、言葉に尽くしがたい貴重な経験をした。

そのときに結んだ山岳地方との縁が細く切れずにいたのだろう。フィリピン・キャンプの約10年後に、日本で、マウンテン・プロビンスのお隣、カリంగా州の人と出会ってフィリピンに移り住み、10年がたった。3人の子供に恵まれ、山岳民族の人たちの暮らしの助けにもなる手工芸品を日本のフェアトレード・ショップなどに卸すという仕事をして生計を立てながら、5年前に環境NGO「コーディエラ・グリーン・ネットワーク」を立ち上げた。市場経済の流入で、山岳地方の本当の意味での豊かさが失われていくのを見すみずみ見すごしては行かれない。日本はぜひぶん先を行って、発展して豊かになったか



奨学生と反町氏

のようだったが、たくさんの大事なものを失ってきたかもしれないと後悔し始めているではないか。私にも日本での経験を生かして、山岳地方のいいところを残しながら生活を改善していくお手伝いができるのではないかと思ったのだ。

ここ10年の山岳地方の村々での生活の変化は大きい。多くの村に車が走れる道路が通い、乗り合いジープが運行し始め、町との交流が盛んになった。多くの村に電気が来て、衛星テレビをもつ家庭も現れ、マニラや世界の情報が町の人と同じように手に入るようになった。この2年の間には携帯電話が急速に普及し、電気や道のない村でさえ灯油の発電機で充電して携帯電話が使えるようになった。

町に行きスーパーでCMで宣伝を繰り返している加工食品を買い込み、テレビと携帯電話を自分の物にするのが、山の村人たちのインスタントな「夢」になった。ほとんど自給自足に近い生活をしていた人々の、「現金探し」の苦闘が始まったのだ。

この国では、大きな決意を抱いて大都市・マニラに仕事を探しにいても、すっかり破綻しきった経済事情ゆえ、山岳民族にまともな仕事などあるわけがない。手っ取り早く短期間で大金が稼げる手段といったら「海外出稼ぎ」である。フィリピンは、国内産業の振興を図る前に、海外出稼ぎを国を上げて奨励しているような国で、8300万人（2004）の人口のうち892万人（2002）が海外で出稼ぎ中とのこと。10人に一人、大家族が多いので一家に一人が海外に出稼ぎに行っている計算になり、その数字は年々増加中。山岳地方における出稼ぎ者も年々すごい勢いで増えている。

山岳民族のおもな出稼ぎ先は、女性の場合は香港や中東でのメイド、男性の場合は台湾や韓国での工場労働者。海外出稼ぎには日本円で50万—70万円（ときにはもっと）という彼らにとっては桁違いの大金を「エージェント」と呼ばれるいわば斡旋業者に払わなくてはならず、借りられるところから借金をしまくって悲壮な覚悟で旅立つ。だから、雇い主との契約が切れても、ビザが切れても、不法に滞在し続ける人が非常に多い。不法就労者として国や雇い主からの保護・保障もなく、見つからないように隠れてお金のためだけに働く日々を送ることになる。

どうにかだれかを海外に出稼ぎに出した家族のほうはひと安心だ。仕送りがあれば、嵐が来て田んぼの米がやられたとしても、町で米を買うことができる。子供のノートや靴を買ってやれる。そしてテレビにオーディオ・セットに携帯電話。とりあえずの夢は手に入る。

しかし、若者たちは田畑を耕すのも億劫になる。学校に行っても勉強して、何とか仕事を見つけても安い賃金。車も買えないし、家なんて建つわけもない。で、地元で働くのがバカらしくなる。かくて、「スタン・バイ」（準備中ということか？ひどい呼び名です）と呼ばれる学校にも行かず仕事もせず、ただただ海外出稼ぎ者からの仕送りを待つだけの若者が増えている。

カリంగా州の州都タブックにある新興住宅地の名前は、なんと「ホンコン」そして「タイワン」。香港と台湾へ出稼ぎ者からの仕送りで建てられた成金ハウスが並んでいるゆえのネーミングだ。それでも、まだ家でも建てば出稼ぎに行った甲斐もあるというもの。送金するお金は「スタン・バイ」の子供たちの洋服代や飲み食い代、果てはギャンブル代に消えてしまっ

う話もよく聞く。

山奥の村でアラブ系の顔をした子供を見かけ、わけを聞けば、母親がメイドとしていった出稼ぎ先で暴行されて宿した子供だという。そんな悲しい話も少なくない。

出稼ぎ組の滞在が長くなれば長くなるほど、家庭の崩壊も起こりがちだ。海外のフィリピン人社会で新しい家族を作ってしまう出稼ぎ者。待ちきれずに、フィリピン側も新たな伴侶を見つける。仕送りはもちろん途絶え、「スタン・バイ」たちは行き場を失い、「やっぱり自分も海外出稼ぎにでも行こうか」と考え始める。なんとという悪循環。

海外組の中でも憧れの的は、アメリカやカナダ、オーストラリアなどへの移民組だ。学歴もあり、職業も持っていて、この国の将来の発展のためにもっとも必要とされている人材が、いとも簡単に祖国を捨てる。かの国々もそういう人材しか、移民として受け入れていないのだから仕方がない。かくして、フィリピンには、とくに地方のコミュニティには、優秀な人材は残らず、コミュニティに根ざした建設的な意見を述べるリーダーなど育つはずもなく、出稼ぎシステムの横行でやる気を失ったぐうたらな若者達が蔓延しているのだ。

山岳地方が近年直面しているもうひとつの大きな問題は「自然環境破壊」だ。山にいながらにして現金収入をもたらすことのできるほとんど唯一の収入源が高原野菜の栽培。ジャガイモやにんじん、白菜、キャベツ、レタスなどの高原野菜は、高地である山岳部のものがいちばん質が良く、バギオやお隣のラ・トリニダードの市場からは、毎日、大量の野菜がマニラに向けて大型トラックで出荷されていく。すでに、地方の中でももっとも交通アクセスのいいベンゲット州のハルセマ道路（バギオからポントクに向かうあのでこぼこ道。ここ数年でだいぶ舗装されてベンゲット州側は道が良くなった）沿いは、みごとにどこもかしこも野菜の段々畑に姿を代えている。昔から家族で守ってきたはずの森さえも切りつくしてだ。しかも見た目がきれいな野菜が高く売れるというので、化学肥料や農薬をたくさん使った農法。台風が来るたびに土壌が崩れて道は遮断し、乾季には水が不足し、わずかな川の水も農薬で汚染される。

野菜産地として最も知られるブギアス町の中心・アバタン村では、水源は1箇所を残してすべて枯れ、水の配達トラックが大忙しで水源から村の各所を走り回っている（もちろん水は有料）。川はよどみ、農薬の影響で、産まれてくる子供たちの中には奇形を持った子供が多く、ベンゲット州立病院のがん患者の半分以上がこの町の出身だという。それが、標高1,800mの山岳部で起きていることなのだ。

それでも、人々は現金を生む効率的な野菜作りをやめられない。有機農業の調査に村に行っても、人々は農薬の人体への影響について痛いほど感じていながら、インタビューには口をつぐむ。健康よりお金、環境よりお金が大事なのである。このお金を生むブギアス型の野菜栽培が、山岳地方の多くの村に広がり始めている。ハルセマ道路が続くマウンテン・プロビンスでも著しい。

こんな広がりつつある環境破壊の波を少しでも食い止めるには何をしたらいいのだろうか？

私たちのNGOが柱としているのは

① 自然環境の価値を教えるための環境教育事業



- ②すでに壊されてしまった自然を修復するための植林事業
- ③環境破壊を最小限にとどめながら人々の現金収入を与えるためのライブリフッド(生計)事業
- ④将来のコミュニティのリーダーを育てるための奨学金事業である。

具体的には、①環境事業としては、山岳部の村の学校で若者向け、学校の先生向け、地方の役所の職員や市民団体向けなどに、「森林保全」「リサイクル」などをテーマとした環境セミナーを開いたり、環境教材として山岳地方の森林破壊の現状を捉えたビデオの制作、小学生向けの環境教育絵本の出版、環境絵画コンテストの実施と環境保全ポスターの制作などを行ってきた。

②植林事業は、ベンゲット州キブガン町(バギオからバスで約5時間)の急峻な山岳地帯で、約50ヘクタールの植林を地元コミュニティの人たちとともにやっている。

③ライブリフッド事業としては、キブガン町での養蜂指導、アパヤオ州ルナでのアグロフォレストリーの指導、その他のコミュニティでの有機農業セミナーなどを行っている。

④奨学金事業は、将来、コミュニティをリードできる人材を育てることを目的とし、カリンガ州のパシル出身と、ベンゲット州のキブガン出身の、地元の州立大学で学ぶ生徒を対象に行っている。本年度は、日本の里親の方々からの支援により53名の学生が学んでいる。

目の前に丸坊主になった山がそびえたち、そこに暮らす人々は水不足から野菜や米が育たなくなり途方にくれているのを目にするとき、すぐにでも苗木を買い与え、野菜と米を手渡すことは容易な援助だが、まずは「教育」をしなくて何にもならないというのが、NGOでのこの5年間の経験から学んだことだ。3年前に植えた20余ヘクタールの一部が山火事で姿を消してしまっただが、その原因は木を植えたコミュニティの住民自身が火を放ったものだという。なんともショックな話だったが、自然環境が自分たちの家族の命、自分の子孫の暮らしにまで関わってくるというサイクルを理解しなければ、切って材木として売れるまでに何十年もかかる木を植えて育てていくために、たいへんな労力を払う人は誰もいない。みな、今晚のおかず、明日の米に困っているのだ。だからこそ、環境の価値を教える教育がすべての事業の前に必要であり、長い目でコミュニティの将来を見据えることのできる若者の育成が必要なのだと思う。



キブガン高校の生徒との植林

先日、私たちのNGOのオフィスのある敷地で週2回催されているオーガニック野菜の朝市で、マウンテン・プロビンスのマリコン村から無農薬のオレンジを売りにきた女性に会った。「20年以上前にマリコンに行ったことがある」と言ったら、「あなた、マリコじゃないの?」と突然言われて驚いた。彼女のご主人は、フィリピン・キャンプで私たちをあたたかくもてなしてくれた青年たちの一人・トーマスで、カリンガ族の人と結婚したという私のこ

とも何度もうわさに聞いているという。

トーマスはポントクの市場で小さな店を営む彼女と結婚し、マリコンで有機栽培によるオレンジ農園を始めたのだそうだ。うわさに聞いていたオーガニック・オレンジの生産者がトーマスだったとは！心からからうれしく、たくましい村のリーダーになっているであろうトーマスのことを誇りに思った。トーマスのような若者がもっと増えれば、山岳地方も、その豊かな自然環境を残しながら、おだやかにゆっくり変貌していけるだろう。

植林も教育も、すぐには結果の出るものではなく根気がある事業であるが、私という小さな外国人にできることを、こちらの心ある人たちと手を携えて続けていきたいと思っている。この豊かな森が永遠に失われないように。

この地を訪れた人の誰もが経験したであろう山岳民族の人々の温かな心がすさんでいかなないように。

そして、人々がかたくに守り続けてきた豊かで貴重な伝統文化が、グローバル化の波の中で葬り去られることがないように。



CGSメンバー in 万博



MOONBEAMS 小

## コーディリエラ・グリーン・ネットワーク Cordillera Green Network

フィリピン・ルソン島北部のバギオ市に拠点を置く小さな環境NGO。「コーディリエラ」と呼ばれる山岳地方の自然環境を守り、そこに暮らす少数民族の暮らしを環境を破壊せずに向をさせ、貴重な文化を守っていくことを目的としています。

コーディリエラ・グリーン・ネットワークでは、2007年度の奨学金プログラムの里親を大募集中（一口15000円）。古着や古文具の寄付も受け付けています。また、山岳地方でのスタディツアー、植林ツアー、バギオでの英語留学などを計画してみたい方もご相談にのりますので、お気軽にお問い合わせください。

Cordillera Green Network

P.O.BOX 540, Baguio City, 2600, Philippines

TEL&FAX 63-(0)74-447-0529 cgn@skyinet.net

## 2006年 あぶらむこの一年

- 1月・この地に来て20年、この間最大の積雪量。おかげで来る日も来る日も屋根の雪おろしや除雪作業の毎日でした。
- 2月・あぶらむ雪祭り（10日～13日）
  - ・沖縄聖コルコ保育園特別雪祭り
- 3月・今年も春が来た、春一番の会
  - ・第10回子供から大人までのネパールの旅（参加者23名）
- 4月・J A岐阜厚生連看護専門学校新入生オリエンテーション・キャンプ
  - ・第13回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋～金沢250km）参加者92名
  - ・神戸家裁より補導委託制度による少年受入れ
- 5月・南山大学人間関係学科ゼミ合宿
  - ・日本聖公会沖縄教区教役者会
  - ・田植え（19日）
  - ・あぶらむスタッフ春の大運動会、富山までサイクリング（75km）
- 6月・ゲシュタルト・セラピー研修会
  - ・韓国メソジスト教会牧師 徐（ソー）一家来日
- 7月・久保田義久大兄 樹木葬
  - ・岐阜 生と死を考える会研修会
  - ・名古屋 聖ルカ教会キャンプ
  - ・立教小学校「自然の中でおもいっきり」キャンプ（5泊6日）
- 8月・第2回あぶらむ自然学校（6泊7日 参加者13名）
  - ・立教大学生フィリピン・キャンプ合宿
  - ・大阪 生と死を考える会研修会
  - ・風の学校キャンプ
- 9月・高山日赤病院看護部研修会（15回目）
  - ・稲刈り（22日）
  - ・脱穀（29日、今年の収量は史上最低）
- 10月・岐阜・富山・神戸家庭裁判所の補導委託先の「登録先」の通知
  - ・乗鞍山麓トレッキングの会（降雪により中止、雨の中穂高方面右股登山道トレッキング）
  - ・補導委託のS少年最終審判
  - ・青木恵哉師の故郷徳島訪問
  - ・神戸家裁より補導委託制度による少年受入れ
- 11月・逝去者記念式
  - ・初雪（11月12日）
  - ・「海と山との出会い」、富山「寿司栄」坂本吉弘さんを囲んで
  - ・韓国メソジスト教会農村伝道訓練院 車牧師一行来里
  - ・韓国メソジスト神学大学 李正培教授一行来里
  - ・味噌用大豆、白菜、大根等冬用野菜収穫
- 12月・本格越冬準備開始
  - ・あぶらむ通信発送
  - ・あぶらむクリスマス会

|||||||寄付者一覧('05年12月7日~'06年11月26日)||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

松岡和夫／東京聖テモテ教会奉仕会／祈りの家教会／片桐多恵子／武原正明／本田りん  
／江田宜子／野崎久子／安藤実・陽子／箕浦純子／八木克道／南知子／長谷川秀司／鬼  
本照男／田中義一／長谷川勉／長谷幸雄／橋岡加都子／原川恭一／伊藤明子／星野直子  
／池田正毅／渡辺直明／久田広子／太田國夫／藤田宏之／杉浦幸恵／木下春子／星野一  
朗／鈴木武次／熊谷一網／浜中好美／味岡努・敏江／島田信弥／俵里英子／佃寿子／二  
井正秀／高畑謡子／高瀬章／谷章子／友沢加代子／福土良子／小林賢三・佳子／小林正  
司／西口晃・喜久枝／鈴木康邦／串間千秋／矢崎ふき子／小泉恵子／田尾兵二／筒井啓  
子／時高照子／金子美弥子／平野淳子／工藤真喜子／門田圭介・恭子／福田桂・亜矢子  
／京野和子／鮫川哲郎／杉山敏子／富永隆史・敦子／高濱友理江／竹田純郎／石田衣子  
／寺田信一／西村哲郎／京都復活教会／森紀旦・敦子／森信俊平／菊澤満喜子／中村啓  
子／尾崎和廣／稲本誠一／宮古聖ヤコブ教会／嘉手苺米子／大嶺佐智子／岸井孝司／外  
村民彦／大杉匡弘／大橋邦一／田中洋子／千葉復活教会／一柳百／伊藤隆／上田亜樹子  
／谷市三／吉田修／高瀬留美／松田あさみ／窪寺俊之／江見淑子／聖フランシス・エリ  
ザベス礼拝堂／池崎純一／太田勝博／溝際庸介／市川聖マリア教会／中村芳枝／湊治郎  
／豊見城聖マルコ教会／津留孝夫／静岡聖ペテロ教会／福岡女学院中学校高等学校宗教  
部／梶原恵理子／鈴木育三／鈴木真喜子／長坂尚／清水秀明／高橋恵太郎／蔦村的孩子  
／横浜聖クリストファー教会／杉木峯夫／西垣正子／大槻カズ子／林賢之輔／金城由美子  
／田中誠／前田晃伸・容子／飯田昭正／宗像和雄／三沢悠子／静谷英夫／畑井正春／松  
戸聖パウロ教会／市川秀一／矢後正子／前田真智子／石元裕美／八代洋子／木ノ内伸子  
／宮崎仁／古沢昭夫／川上玲子／安達宏昭・真理子／神田キリスト教会／大塚梅子／坂  
本吉弘／保井亮／戸塚鉄也・恭子／中村洋／成瀬真智子／宮城正子／愛知聖ルカ教会／  
久保田義久樹木関係者一同／永井深雪／坪島行雄／東京セントポールライオンズクラ  
ブ／土師晴子／小仲宏／大畑こふみ／松尾正枝／鬼本麗子／安田育子

|||||||新規会員('05年12月6日~'06年11月26日)||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

武原正明／伊藤文雄／伊東日出子／石戸谷正子／竹森せい子／酒井忠喜／福田桂・亜矢  
子／尾崎和廣／上田敏明／矢野裕史／新開春樹・桂／丸山正樹／森田喜之／松浦香恵／  
金子眞／小池直子／目崎甲式／武藤六治／西口晃・喜久枝／谷莊吉／保井亮／小野田恵  
子／渡辺信子／原田道一／布俊晴／吉野美智子

多大なご支援ありがとうございました。心より感謝し、お礼申し上げます。